

記憶の継承 (1)

——『『仕方がない』では済まない』という言葉が問いかけること——

嶋守 さやか 五郎丸 聖子

The Succeeding of the Memory (1)

—The Study of the Aftermath of a Word of “THE PAST CAN’T BE ACCUSED in the War”—

Sayaka SHIMAMORI and Kiyoko GOROUMARU

はじめに (嶋守)

I 歴史のなかの問い (同前)

II 満洲開拓の問いと語り (五郎丸)

おわりに (嶋守)

はじめに

1902年の晩秋のころ——ウィーン新市街の陸軍大学の校庭で学校牧師のホラチェックが語ったライナア・マリア・リルケの理解を得ようと、フランク・クサーファ・カプスは自作の詩を送る。明瞭な、美しい、正確な文字で埋められたリルケの書簡は、「今日また明日の、成長途上にある多くの人にとって重要なもの」であった。

ソネット (フランツ・カプス)

私の生の中を、嘆きもなく 溜息もなく、震えて通る暗い暗い痛み。
私の夢の清浄無垢な花吹雪は 私の静かさきわまった日々の奉献式。

だがますます、大きな問いが私の径を 横ぎるようになる。私はすくみ
凍えて通り過ぎる、水の深さを 測るだけの勇気もない湖のそばを過ぎるように。

するとその時ある悲しみが私の上に沈んでくる、星が——時どき——ちらほらと漏れてくる
光乏しい夏の夜の灰色にも似ておぼおぼしく。

その時私の手は愛を求めて手さぐりする、私の熟した口が見いだすことのできない
ひびきを祈りのように口ずさみたいからなのだ……⁽¹⁾

リルケがこのソネットを「あなたの御作品の中で最も傑れた」と評した所以は、「問い」にある「忍耐」にある。自らの「問い」を愛すことを説いたリルケだが、では、筆者らが今、愛すべき「問い」への忍耐として受けとめられることは何か。「記憶の継承」が謳われる今、筆者らが出合った愛すべき「問い」を示していきたい。

I 歴史のなかの問い

1 新学習指導要領における「問い」

「問い」とは、何だろうか。「問い」が導く思考の先に、何があるのだろうか。リルケのいう「問い」への愛、「問い」にある「忍耐」は現実にはどのようにあるのだろうか。

『平成29年版 小学校新学習指導要領ポイント総整理 社会』(2017)の冒頭に、文部科学省初等中等教育局視学官の澤井陽介氏の特別インタビューが掲載されている。「新しい社会科が目指す地平『未来志向』」、「『問い』が変われば、『思考』が変わる」と示されている。

今回の改訂で目指したことは、帰納的な学習スタイルです。①何に着目し、②それらの組み合わせをどう考え、③最終的にどのような概念に迫っていくのかという学習プロセスへの質的な転換を求めたことです。

いままでは、とすると、①何を教える、じゃあ次は②何を教えるために具体を説明するという、いわば演繹的なプロセスの授業も多く見られました。それ自体を否定するつもりはないのですが、そのような学習スタイルである限り、3つの「資質・能力」を総体として育むことは難しいです。⁽²⁾

3つの「資質・能力」とは、「学校教育法（第三〇条）に規程された学力を構成する三つの基本要素を踏まえて、子どもに育成すべき」ものである。それは、次の「三つの柱」で整理されている⁽³⁾。「学びの成果として、生きて働く『知識・技能』、未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』、学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』」のことである。「学びの過程において子供たちが、主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結び付けたり、多様な人との対話を通じて考えを広げたりしていることが重要」とされる。主体的に、対話的に、深く学んでいくことによって、「未来を切り拓くために必要な資質・能力を身に付けたり、生涯にわたって能動的に学び続けたりできます。また、それぞれの興味や関心を基に、自分の個性に応じた学びを実現していくことができます」⁽⁴⁾と。

さて、澤井が先の冒頭で示した「問い」、そして「最終的に迫っていく」という「概念」とは何か。澤井の回答では、「小学校社会科であれば、『みんながそれぞれに調べた事実をもとにして、学習問題の解答（概念）に辿り着く』とされている。「学習問題の解答」が「概念」になっている。「まず事実から入り、目を付けて、そこから辿っていけば、概念がつかめる」とされている。「構成主義的という言葉が正しいかはわかりませんが、『事実から概念に迫

ていくプロセス』、「すなわち、子供たちで結論をつくりあげるということ、その理解の方向性」の最終地点に概念の獲得があると考えられている。そして、「ビルドアップ」される学習による「子供たちの様々な思考のありようをコントロールするのか『問い』」であり、「教師の大きな役割は、単元の学習を進めるうえでの大きな方向を描く、目標に向かう問いをつくること」であるという⁽⁵⁾。

まずは教師の指導ありきです。だから、指導案に書き込む学習問題という「目標に向かう問い」は、教師が準備しておいたほうがよいと思うのです。そして、最初のうちは、教師の指導意図に基づいて子供たちの小さな芽をだんだん膨らませていって、ある段階から「この人たちは何のためにこんなことをしているのだろう」という、意味に迫る問いに子供を引き込んでいくのです。⁽⁶⁾

「目標に向かう問い」、「意味に迫る問い」へと子供を引き込んでいくために求められる教師の能力は、こう示されている。

教師はつなぎ役です。リード役であり、つなぎ役。リードしているけれども、強引なリードではなくて、子供の発言やハテナをつなぎながらリードしていくということです。教師のつなげる力。不易的でありながら、これからの新しい学習指導要領下の授業をつくっていくうえで、重要な能力のひとつだと考えています。⁽⁷⁾

「ある問いを意味に迫る問いに育てあげる」ためのトレーニング方法は、澤井によれば「簡明瞭」である。「自分の資料を眺めながら自問自答するだけです」。そして、「一人芝居のように教師一人で何役も引き受けて、『こう投げ返せば、きっとあの問いが生まれるはずだ』という手応えにまで高めていくのです」⁽⁸⁾。

では、教師が自問自答して「問いを意味に迫る問いに育て上げる」、新学習指導要領の下にできあがる新しい教科書とはどのようなものであるのだろうか。

2 歴史教科書における「問い」

「ある問いを意味に迫る問いに育て上げる」新学習指導要領に基づく新しい小・中学校の教科書を見ることができるのは、これまでを見るかぎり、検定の後に自治体での教育委員会採択の直前であるという。2019年に小学校、2020年に中学校で採択されることになる教科書が閲覧可能になるのは、自治体の差があるが早くとも採択前の6月あたりだと見込まれている。

しかし、現時点で「問いを生み出す」中学校の歴史教科書として、興味深い事例がある。市販本『増補・学び舎中学歴史教科書』(2016)がそれである。編者である子どもと学ぶ歴史教科書の会(略称「学ぶ会」)は、「今までにない教科書をつくろう」という志で2010年に結成された。研究会で四次稿まで推敲を重ね、20人以上の歴史研究者からの校閲を受け、2015年

に検定に合格した学び舎中学歴史教科書（以下、学び舎教科書とする）は、国立・私立の38校に採択されている。

学び舎教科書で興味深いのは、通史的な歴史の叙述がないことである。学ぶ会では、当初から通史的に歴史を叙述することに疑義があった。というのも、「通史とは、単に歴史の基本的事実を時間軸に沿っておいたものではない。事実を選択するには理由があり、選択した事実をどのように構成するか、それ自体が叙述者の価値観をもってなされている」⁽⁹⁾ためである。「歴史教育に求められているものは、子ども自身が考えて歴史認識を培っていく、子どもの側から出発する学習の過程」であると考えた学ぶ会では、子ども論、教材論、授業論が話し合われた。

子どもが概念を獲得するには道筋がある。「中学生は、自分がどのように生きるかを考え始める時期であり、過去の人びとの生きた姿に関心を持つ」。「具体的事実に接することで子どもの中から疑問や問いが生まれ、自分で描いた時代像と結びついた概念を獲得していけば、それは生きた知識に結びついていく」。「人びとが目の前の出来事に向き合い様々な形で取り組む姿、人びとの切実さや決断は、生徒に驚きや発見を呼び起こし、様々な疑問を生み出していくだろう」。このように子どもを捉えた学ぶ会は、「教科書本文の最初の第一セクションやフォーカスには、歴史の事実や場面」、たとえば「働きや暮らしを描いた日常であったり、歴史の転換になるような事件」であったり「たたかいや戦争」の場面を具体的に描いた⁽¹⁰⁾。

また、「教科書には子ども」、たとえば「売られる子ども、育ちにくかった子ども、戦火の中の子どもたち」を「多く登場させ、その働きや学び」が書かれた。「生徒たちにとって、大人の生活には距離があるが、子どもの生活には親近感がある。歴史の中の子どもの姿に接して、生徒たちは、より多くの発見や疑問を出し、歴史への関心を高めていくだろう」とされている。

「今日の様々な課題を主権者として考える」上で大切だと考えられているのは、「戦争に至る原因・経過と戦争の実相を知る」ことである。「戦争の学習は生徒に衝撃を与え、問題意識を呼び起こす。一方で、戦争は今の生徒の日常から遠く、残酷な事実から目を背けたい生徒も少なくない。しかし、そのような場合でも、中学生は戦争体験者の話には耳を傾ける。体験者が思い出したくないはずの過酷な過去を語るのはなぜなのか、そこに思いが至った生徒たちは、事実の重みを受け止めようとする」。「教科書には、南京事件で家族を失った夏淑琴(当時八歳)、中国の戦場で捕虜の前に立たされた森田忠信(二三歳)、渡嘉敷島の集団自決の現場にいた金城重明(一六歳)、原爆投下後の広島で、校舎の下敷きになった子どもを助けられなかったことを悔やみ続ける加藤義典(一七歳)など、体験者の証言や証言に基づく記述」が多く入れられている。「こうした人びとの姿と声は、『なぜこのようなことを起こしてしまったのか』という思いを生徒たちに深く呼び起こし、様々な疑問や問いを生み出すことだろう」という編者たちの期待がそこにある⁽¹¹⁾。

「社会科では、学会などでの歴史研究が進んだことなどに合わせ、歴史上の出来事や人物名の表記を変えるケースが小、中学校合わせて6件あった」ことが2017年2月15日の朝日新聞で報じられている。「日中戦争」もその1つである。事例を基に扱われる学び舎教科書の編者たちの考えは明確である。「生徒は様々な問いを持つだろう。その中には、すぐに調べるこ

ができそうなもの、簡単に答えが出せそうにないもの、今日的な課題と結びつくものなどがあるだろう。歴史教育で大切なのは、教科書や教師がすっきりと答えを出してくれることではなく、生徒が学習で芽生えた問題意識を抱えて学んでいくことではないだろうか。歴史の事実を印象深く心に刻み、学習を重ねながら、自分自身で歴史の見方を培ってほしい」のだと⁽¹²⁾。

では、「生徒が学習で芽生えた問題意識」はどこにつながっていくことになるのだろうか。事例としてあげられた「体験談」の学習で培われた自分自身の「歴史の見方」は、近代歴史研究においてはどこに行き着くことになるのだろうか。

3 日本近代歴史学における語り

教科書検定がなされた「体験談」を語りとしてみるならば、日本近代史における口述記録としての「語り」の捉えられ方を確認することも、必要であるだろう。従来、日本近代史の主な分析の対象は「制度」と「運動」であるとされていた。「公共的領域の要として認識」されていた「このふたつの対象には史資料が豊富に残されており、『実証』が保証される領域であった」。「戦後歴史学」と呼ばれる1950年代の近代歴史学では、「戦争への論究がすべて開戦への経緯と講和の叙述に終始」していた。1960年代以降、歴史学では「民衆史研究」が、「非日常（事件、運動）と日常との関係に着目し、『戦後歴史学』が扱ってきた運動に先立つ、日常や戦争のなかの日常」つまり「私領域」を論ずるに至ったという⁽¹³⁾。

戦争のなかの日常という「私領域」としてまず論究されたのが、民衆（兵士）の戦場での経験、そして「慰安婦」問題であった。それまでの歴史学が対象とする性は公娼（制度）、廃娼（運動）、産児制限（運動）に集中しており、「ここでも制度と運動の次元に限られていた」。しかし、1980年代後半以降の「慰安婦」問題は近代歴史学に「人間存在にあらためて接近することを促し、歴史学における『領域』—『対象』—『方法』—『認識』—『叙述』の工夫があらたに試みられる」ことになった。というのも、「性暴力の史料といったとき、当事者による史料の不在と空白がついてまわる」。そのため、戦争の史的考察における実証、文献史料の位相と意味が改めて問われることになった⁽¹⁴⁾。こうした背景のもと、日本の近代歴史学において、言説分析の手法、オーラル・ヒストリーへの関心が高まったのである。

人見（2017）によると、「文字資料が決定的に不足している領域」として、「自らの手で歴史資料を残すことの少ないマイノリティや女性、民衆といった無名の人々の経験」がある。それらを「聞き取り、人々の生活の実態や思想を明らかにするために」、口述資料による「補完」を目的としたオーラル・ヒストリーがある⁽¹⁵⁾。

「歴史学がオーラル・ヒストリーの方法を議論の遡上にのせた最初は、口述資料を文字資料の優劣が主要な論点のひとつ」であった。しかし、口述資料の資料としての不確実性は、文字資料にも同様の制約があるという史料読解上の認識が深まるにつれ、「史料読解の場において、歴史家は、(1) 口述資料とそこから導き出される『事実』、(2) 現実世界の全体性、(3) 〈私〉（聞き手）の内面性の三つに拘束される」と整理された上で、「口述資料と文字資料のあいだに決定的な相違はなく、むしろ共通性が基本だ」とされた⁽¹⁶⁾。

(3)の論点において、聞き手は〈私〉と〈 〉付きで示されていることに注目したい。人見は、「史料から歴史像を構成して歴史叙述をめざすのが歴史学の学問的使命であるならば、〈わたし〉の存在を含み込んだ歴史叙述はどのようにして可能か、それを議論することは、つとめて歴史学の課題である」という⁽¹⁷⁾。そもそも「ばらばらな史料をつなぎあわせて『事実』を確定しようとするとき、史料は歴史家の主観とは無関係ではなくなっているが、「口述資料はその生成の過程において歴史家が関与している」⁽¹⁸⁾。それは、「口述資料の共同構築性を前提にすれば、口述資料は語り手と聞き手の双方の主観的現実である」ためだ。だからこそ、「歴史家が口述資料を前に歴史叙述を行おうとするとき、聞き手の主観とも向き合わなければならない。聞き手はたいていの場合、歴史家自身であるため、歴史家は自分自身＝〈わたし〉と対峙せざるをえなくなる。すなわち、歴史家は〈わたし〉を分析対象としなければならないのである。〈わたし〉を対象として、どのように歴史叙述を行うことができるのか」⁽¹⁹⁾。

では、わたしを囲む〈 〉とは何か。それを示すために、ここでマックス・ウェーバーの歴史論に迂回することにしよう。先にみた学び舎教科書の事例で確認したように、「誰が語るか」を超えて、さらに「誰に向かって」聞き取った声を語るかとの論点も浮上し、「あらたな世代に語るという要因」すなわち「記憶の段階に入った戦争体験を把握し叙述する歴史学の刷新」が、歴史教育にとまって加わってきているという。現に、「通史」のない学び舎教科書の授業では、あらたな世代の子ども「が語る」歴史教育が行われているのである。

語る〈わたし〉、語られる〈わたし〉とは誰なのか。歴史における〈わたし〉とは何であるのかを今一度、ここで整理しておきたい。

4 「わたし」のなかに〈わたし〉をつくる

現実科学としての歴史についてのウェーバーの叙述は、次の2つである。

歴史は「現実科学」である。しかしそれは、歴史がある現実の全内容を「模写する」という意味からではない——それは原理的に不可能である。そうではなくて、歴史は単に相対的に概念規定されるにすぎない所与の現実の構成部分を、「実在する」構成部分として具体的因果関係に差し込むという意味からである。⁽²⁰⁾

歴史にとって——このことは、そうした表現「歴史は現実科学である」をしようとすることを承認するものだが——現実の一つ一つの個別要素は、単に認識手段となるだけでなく、もっぱら認識対象となる。そして具体的因果関係は、認識根拠としてではなく、実在根拠として考察される。⁽²¹⁾

歴史がある現実の全内容を「模写する」ことは原理的に不可能である。よって、現実の一つ一つの個別要素は、組み合わせればたやすく全体が復元できるといったような、現実を成す絶対的な構成要素とはなりえない。それは歴史を叙述する主体によって、ある個別要素が他の

構成要素から選別されている時点で常にすでに、「相対的に概念規定された部分的な構成要素」⁽²²⁾であるためである。「原理的に言えば、ある出来事が生成するには、そこに無数の力が組み合って働いている。その出来事の生成に先行するあらゆる出来事が、その出来事の生成と関わっているということになる。先行するあらゆる出来事のうち、どれ一つが欠けても、そのような出来事の生成にはならない」⁽²³⁾。歴史はその履歴に依存するからだ。

では、「結果に先行するものすべてがその結果に作用を及ぼしている」なかから、「特定のものを原因として選択する時、その選択の普遍性は何によって保証されるのか」⁽²⁴⁾。ウェーバーはこう答える。

行為する人間が〔現象として自然のメカニズムに従うと〕同時に、ノウメン [=物自体]（純粋な叡智者、つまり時間によって規定されない現存在）として自己をみなす限り、世界における出来事は、自然法則による原因の規定根拠を自然法則からまったく自由な原因の規定根拠としてもつことができる。⁽²⁵⁾

物自体（純粋な叡智者、つまり時間によって規定されない現存在）としての〈わたし〉——ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の「使命完遂 Berufspflicht」の思想は、かつての宗教的信仰内容の亡霊 *Gespenst* として、われわれの生の中をさまよっている」⁽²⁶⁾とした、「現実のプロテスタントとはいかなる関係ももたない、無限判断としてのプロテスタント、存在にして無の先験的理念としての《プロテスタント》」⁽²⁶⁾という〈 〉つきのわたし——が、選択の普遍性を担保する。つまり、いかなる歴史の叙述や語りの始点は作為であり、歴史家は常に「作為の始点を見出し、その始点が無根拠であることを発見すること」⁽²⁷⁾に対峙する誠実さや真摯さが問われることになる。

無根拠に、いかなる説明や属性をももたない〈わたし〉が語る主体と聞く主体で共有されるから、語り、あるいは歴史自体が成立する。無根拠であるのだから、ただそれがあるということ単純に信じて、受けとめること。語るわたしと語りを聴くわたしのあいだに、共通理解がないからこそ、ただその語りに耳を傾け続けること。語られる緩やかな時間のなかで、ある個別の出来事を現象の原因と決めつける粗雑な因果論で、安易に自らが拠り所とする相対論を絶対化しないこと。これらをこの論文の冒頭で掲げたリルケの「問い」への忍耐について、若き詩人、カプスへの言葉からひくならば、こう示すこともできる。

あなたの懐疑への傾向とか、外部と内部とを調和させることができないとおっしゃることとか、そのほかあなたを苦しめるすべてのことに関して、私の申上げられることは、——いつももう私が申上げたのと同じことになるからです。堪え忍ぶだけの忍耐と、信ずるための十分な単純さとを、自分自身の内部に見いだして下さるようという希望です。また、困難なものや、他人のあいだで感じられるあなたの孤独に対して、ますます信頼を深めていただきたいという希望です。それはともかくとして、人生をしてそのなすがまま

になさしめて下さい。どうか私の言うことを信じて下さい、人生は正しいのです、どんな場合にも。⁽²⁸⁾

人の語りは、人生の写しである。人であるのだから、語りには記憶違い、思い込みや勘違いがある。それらを切り捨てたり、歴史における普遍として因果論を持ち出せば、たちまちに暴力が立ち現れる。アウシュビッツに抑留され、隙を見て外に出ることができた数少ない生存者であるルドルフ・ブルバの回想録にある、「私の母のような、共産主義者でも、社会主義者でも、金持ちでも、シオニストでもない普通の人々は、シオニストにとっては死んでも仕方がない人間なのか？ 一体どうやって生き延びるのだ！」⁽²⁹⁾という抗議にある、恣意的に「誰が人間なのか」が定められる境界線にあるものを想起しよう。「第二次世界大戦を反省するとなれば『この現場にいて、死んだり、抑留されたりした人は特定の人かもしれないが、これと同じことが他の誰にも起きてはいけない』という反省しか、反復のしようがなく、『生きるに値する命』と『生きるに値しない命』の線引きで『生きるに値する命』だったはずのユダヤ人たちを『生きるに値しない命』の側に入れたのが間違いでした」という「適用の範囲を間違えましたという話」⁽³⁰⁾と語りの切り捨てあるいは語りの代弁にさほどの距離はない。それは両者とも、発話者が相対論を絶対化する粗雑な因果論を自らの議論の根拠としてしまっているためである。

歴史家が「他者の記憶や経験を代弁する」こと、すなわち「他者の経験を一方的に定義づける暴力性に敏感とならざるをえない」⁽³¹⁾という立場は先の人見や成田の議論にも示されている。歴史家には「他者のことばを奪い取り競い合う『歴史的真実』ではなく、『歴史への真摯さ』（テッサ・モーリス＝スズキ）が求められている」⁽³²⁾のである。

ここまで確認してきたところで、次章からはこの論文の筆者らの「問い」とそれを辿るプロセスを具体的に示していきたい。それは、「満洲開拓」の語りを巡る「問い」である。

II 満洲開拓の問いと語り

1 ある男性の問いが語りかけたこと

2017年3月31日から4月3日までの4日間、東京の武蔵野市にある武蔵野プレイス・ギャラリーで第3回むさしの平和のための戦争展（以下、戦争展）が開催された。2017年は1937年7月7日の盧溝橋事件を機に始まった日中戦争から80年目であった。そこで、むさしの科学と戦争研究会（以下、研究会）は中国戦線での日本兵の日常を記録した村瀬守保写真展を開催した。筆者も、研究会の一員としてこの戦争展に関わった。

村瀬は1937年7月の盧溝橋事件の折に、28歳で輜重兵⁽³³⁾として後方部隊に配置された。写真が好きだった彼はカメラ2台を持ち兵士の日常を撮っていたため、軍の非公式写真班として認められた。2年半で彼が撮った写真は約3000枚にもなった。そのうちの50枚が、現在、展示パネルとなっており⁽³⁴⁾、戦争展でも展示された。そこには戦場における兵士の日常、例えば互いを散髪し合う姿や「慰安所」⁽³⁵⁾に並ぶ姿、南京市内で折り重なる遺体を見下ろす姿があっ

た。

研究会は、この写真展から日中戦争について考える契機を提起したいと考えた。1945年に敗戦を迎えた戦争が取り上げられるとき、日本社会ではその被害に目を向けて語られることが多い。当然、それは非常に大切なことだが、日本による加害の側面に焦点を当てることが少ないことはこれまでも指摘されてきた。戦後の日本社会で先の戦争に対して繰り返し唱えられる「二度と同じ過ちは繰り返さない」の「過ち」が、人びとにもたらされた心身への苦痛だと捉えるならば、日本における被害者も、日本により生み出された被害者も全てに思いをいたすべきであろう。だが、それは十分になされていない。日本の被害だけが取り上げられ、加害が取り上げられないからというだけでなく、被害についても十分に追求してきたとはいえないのではないか。もしそれがなされていたなら、被害と加害の両面に向き合っていたはずである。なぜなら被害と加害はつながりあったものだからだ⁽³⁶⁾。研究会では、これまでも戦争、植民地支配における日本の加害に焦点を当ててきたが、それはこのような問題意識からだった。

ギャラリーでは村瀬の写真パネルが展示されるとともに、日中戦争での加害体験を語った元兵士の証言ビデオなどが終日流された。

開催中のある日、筆者は会場出入り口で受け付けをしていた。場内を見ると、初老の男性がパネルを熱心に見つめていた。その後、証言ビデオをしばらく見てから帰ろうとした男性に、アンケートへの記入を呼びかけた。「いえ、それは」と辞退した彼に、「熱心にご覧になっていらしたので一言でも」と筆者は告げた。男性は、「仕方なく戦争に加担したというような話に出くわすと『違うんじゃないか?』と思ってしまう」と唐突に言った。

「違うんじゃないか?」とは、どういうことなのだろうか? 彼は訥々と語り始めた。彼の両親は満洲開拓に反対した。そのことが要因で、戦後、両親は暮らしていた地域で疎外された。彼の父親が何をしようにも、「引揚者や負傷兵士の仕事を取り上げるな」と言われて精神的に追い込まれ、仕事もままならなかった。そのために男性は貧乏して苦勞した。だから、「仕方がない」とだけで済ませられては困るのだ。そう言って帰って行った。これは、記録しておかねばならないことだと筆者は感じ、突き動かされるように彼の語ったことを書き付けた。

彼の語りが意味したものとは何だったのか。その後、自問自答を筆者は繰り返した。

彼が見ていた写真パネルには、村瀬守保自身の言葉がキャプションとして掲示されていた。その中に、「戦場の狂気が人間を野獣にかえてしまうのです。このような戦争を再び許してはなりません。」とあった。証言ビデオには、上官の命令に逆らえないこと、あるいは部下から馬鹿にされることを怖れるあまり、残虐な行為をしてしまったという体験を振り返る元兵士の姿があった。これらは、こうした状況を「仕方がない」状況だったと言外に語るものであったと言えるだろう。

「拒否することはできず、仕方がなくやった」と記録の中で元兵士は語るが、戦時下の追い込まれた状況で、両親のように満洲開拓に反対した人間もいた。反対という態度の選択は、その後の彼らの人生に多大な影響をもたらした。だから、展示内容と両親の語りを重ね合わせたとき、男性は、元兵士の語りに「違うんじゃないか」と感じたのではないか。筆者はそう

に想像した。

これまで研究会では戦中の加害の実態を伝えることに注力してきたが、抵抗した人びとについては正面から向き合ってこなかった。男性の言葉によって、そのことに気づかされた。この時の心境を筆者は戦争展のレポートで、こう記している。

戦争への「加担」が当然視され、少しでも異議申し立てをすれば、非国民とものしられるような空気が戦時下に充満していたことは、戦後生まれの私でも伝え聞いて理解していた。だからこそ、そんな空気だったのだから仕方がなかったんだ、という言説を当たり前を受け入れていたのである。だが、中には、抵抗をされていた方もいた。(…中略…)そういう方々やそのご家族が、当時どのような思いでおられたのか、今どのように思われているのか、というところまでは想像できていなかった。⁽³⁷⁾

その後も、「仕方がなかったということで済ませてもらっては困る」という戦争展での男性の語りの本意は何だったのかという問いは筆者の内に残り続けた。満洲開拓に反対した人のことを知らなければ、彼が言わんとしたことをきちんと理解できないのではないか。住んでいた地域等、具体的な手がかりとなることについて、彼は何も語らなかった。だが、満洲開拓がどのようなもので、そこに関わった（開拓団に加わったかどうかに関わらず）人びとがどのような経験をし、何を感じたのか。まずは、そこからだ。筆者は調査を始めた。

2 満洲開拓について知る

満洲開拓に関する研究は、歴史学では1970年代に注目され⁽³⁸⁾、80年代までに日本の帝国主義的政策について政治的、経済的側面から検討されてきた。また、70～90年代半ばには、「開拓史」の編纂が開拓自興会などによって進められた⁽³⁹⁾。1990年代に入ると対象やテーマが多様化し、歴史学だけでなく社会学や経済学などからもアプローチが見られるようになった。

満洲における日本人を対象とした研究は社会学の分野で進み、とりわけ蘭信三をはじめとした満洲移民の記憶の研究が多く見られるようになる⁽⁴⁰⁾。2000年代に入ると、歴史学では、「満洲引揚資料」⁽⁴¹⁾の整理、調査が滋賀大学経済経営研究所で始められ、現在それらは公開されている。昨年は、加藤聖文の『満蒙開拓団 虚妄の「日満一体」』が出され、複雑な構造を抱えた国策の実態が政策史の視点から検証された。以下では、政策史から満洲開拓の背景を掴みつつ、社会学における研究に依りながら、そこに関わった人びとが置かれた状況に接近していく。そのプロセスを通して、筆者が戦争展で出会った男性が語ったことの意味を考えていきたい。

ここまでに使用してきた満洲という用語であるが、日本による「満洲」⁽⁴²⁾支配の侵略性を明確にするには括弧を付けて表されるべきであった。このことを確認した上で、煩雑となるため、以下では括弧を省略する。また、日本では満州と満洲の二通りの漢字表記が見られるが、江戸時代からすでに混用されていたという⁽⁴³⁾。本稿では、戦前に一般的であった満洲を使用し、書名や引用はもとの表記を優先させることとする。

(1) 満洲国への開拓団派遣

1931年9月、満洲事変が勃発し、翌1932年3月に満洲国が成立した。日本人の生活空間は満洲全域に拡大し、在満日本人の総数は1930年代半ばに50万人を突破した⁽⁴⁴⁾。満洲国への開拓団派遣は1932年から試験的に行われ、1945年までの14年間に、約27万人が農業移民として送出された。1936年には広田弘毅内閣のもとで七大国策のひとつにあげられ、「二十カ年百万戸送出計画」が発表される。満洲移民政策において最も重要な転換点であった。一般にこの計画は2.26事件の結果として生まれたとされているが⁽⁴⁵⁾、実際にはそれ以前から関東軍内で検討されていた。関東軍と極東ソ連軍との軍事バランスが崩れつつある危機感により生まれた計画であり、対ソ戦を前提とした軍事的要請に基づくものであった⁽⁴⁶⁾。

翌年1937年、満洲移民事業と農村経済更生運動を結びつけた分村移民計画がたてられた⁽⁴⁷⁾。分村移民⁽⁴⁸⁾方式は各県・各部・各市町村単位における移民の動員数、動員方法を具体化・明確化したもので、これにより移民の大量送出が可能となった。同時に、農地不足の解消と母村における経済の更生も見込まれた。分村移民方式は、農村に機能する村落共同体を巧みに利用して推進されていった⁽⁴⁹⁾。

満洲移民事業の成果をあげるため、中央官庁と地方との連携強化が図られていった。拓務省は内務省や農林省との連携を築きながら、地方に対して積極的な送出を要求した。

これまで農林省は経済更生計画による農村建て直しを図っていたが、土地所有制度を改革しなければ実績はあがないという矛盾に陥っていた。省内では満洲移民に対する消極的意見が強かった。このような中で農林省経済更生部⁽⁵⁰⁾長の小平権一が関東軍顧問として満洲国の農業政策に関与するようになり、関東軍と農林省との関係強化の橋渡し役を担うこととなる。長野県大日向村の分村計画が社会的に注目を浴びようになると⁽⁵¹⁾、農林省も積極姿勢に転換する。こうして経済更生計画と分村計画が連結し、大量移民送出のメカニズムが完成したのである。

他方、関東軍は有事の際の兵力補充の観点から青少年を対象とした移民を計画する。これに加藤完治の構想が絡み合い、「満蒙開拓青少年義勇軍」が誕生する。しかし、義勇軍制度は当初から軍事目的であって本来の移民政策からはかけ離れた異質なものであった⁽⁵²⁾。

「二十カ年百万戸送出計画」の開始に合わせて、送出側の満洲移住協会（以下、満移）は1937年4月に財団法人となり組織的な拡充整備が行われた。満移は全国を9つのブロックに分け、東北三県、東山（山梨、長野、岐阜）・中国・九州各二県、関東・北陸・東海・近畿・四国各一県を選別し、各選別県内から数十の町村を集中村に指定した。そこで、移民送出が積極的かつ計画的に働きかけられるようになっていったのである⁽⁵³⁾。

だが、日中戦争が長期化し農村の成年男子が召集され、軍需景気による都市への労働力流出が広がると、計画は行き詰まりを見せ始めた。関東軍は政策強化のために、1939年末に「満洲開拓政策基本要綱」を決定する。青少年義勇軍の拡大、満洲建設勤労奉仕隊の創設にとどまらず、戦時体制であぶれた中小商工業者等も開拓民の対象とされ、帰農開拓団として満洲へ送り出された。しかし、開拓民の送出はますます困難になっていった。地方での送出割り当ての

ノルマは厳しさを増し、なかば強制的な開拓民選出が行われるようになっていく。農村共同体のもつ共同体規制に基づいてなされたそれは徴兵や徴用と並ぶ戦時体制下の一種の「動員」としての性格を色濃く持つようになった⁽⁵⁴⁾。引揚げ後、少なくない満洲移民体験者が「満洲へ行くことを強いられた」と証言しているのもこうした選出のあり方と関係していた⁽⁵⁵⁾。戦局が悪化し、開拓団への食糧増産要求が厳しくなると、有事の際の後方支援基地としての役割がさらに重視されるようになっていった⁽⁵⁶⁾。

(2) 満洲移民事業の終焉、逃避行のはじまり

満洲移民事業は敗戦とともに終焉を迎える。ソ連軍による対日宣戦布告、満洲進攻とともに、その終焉は始まった。ソ連極東軍174万人は、8月9日午前零時、東・北・西の3方面から進攻を開始したが、ほとんど抵抗を受けることなく各都市を順次制圧していった。8月15日の天皇による終戦の詔勅を受け、翌16日、大本営は即時戦闘行動停止の命令を発した。8月17日、関東軍が前線に対して停戦命令を発し、18日の未明に皇帝の退位と満洲国の消滅が決定した。関東軍総司令部と極東ソ連軍総司令部との停戦協定は、19日に締結された⁽⁵⁷⁾。

この時点の満洲（満洲国と関東州）在留の日本人は約155万人だと言われる⁽⁵⁸⁾。軍人、軍属は50万人であったが、そのほとんどはソ連軍の捕虜としてシベリアとモンゴルに抑留された⁽⁵⁹⁾。開拓団の男性約5万人は、対ソ開戦に備えてすでに兵士として応召していた。関東軍によるいわゆる「根こそぎ動員」によって、多くの団は成年男子を失っていたのである。農村部には年配の男性、女性、子ども、約22万人が残されていた⁽⁶⁰⁾。このうち、約8万人が亡くなり、約1万人が残留、約13万人が日本へ引揚げた⁽⁶¹⁾。

開拓団の入植実態、経営形態、日常生活は、今なお知られていないことが多いという。その要因に、開拓団の人びとの語りが敗戦後の逃避行の悲劇に覆われすぎていることがある⁽⁶²⁾。彼らはソ連軍の進攻が始まる日に出された避難命令に従って都市へと避難し始めたが、多くの鉄道や橋は戦略的に破壊されていた。ソ連軍や中国の武装グループから逃れながらの避難行動では多くの悲劇が起きた⁽⁶³⁾。その根本的原因是日本帝国主義の尖兵の役割を担わされたことにあった⁽⁶⁴⁾。つまり、彼らの多くは北東部の辺境国境地帯に配置されており、それゆえ、開戦と同時に関東軍に見捨てられ、引揚げの悲劇の多くの部分を背負わされることになったと言うことである⁽⁶⁵⁾。

引揚げ経験は、開拓団に限られるわけではない。日本の植民地であった台湾、朝鮮、南洋、といった地域からも日本の敗戦を機に引揚げが始まった。満洲の都市部に居住した人びともそこには含まれていた。だが、その中で最も混乱を極めた経験をもつのは開拓団の人びとであったといえるだろう。坂部晶子（2008）によれば、彼らの逃避行の語りは多くの開拓団で不思議なほど類似するという。少し長いが引用する。

「満洲」奥地の開拓村で、1945年8月9日、ソ連軍が侵入してくるから集結せよとの指令が唐突に開拓団に下される。団の男性は、その年の「根こそぎ徴集」で兵役に駆りださ

れ、残っているのは年配の男性数人と女性、子どもばかりであった。11日晚の電話で翌日昼までに駅に疎開することになり、慌てて10日分の食料と衣類を馬車に積んで、翌早朝、村からいちばん近い鉄道の駅まで向かう。駅には他の開拓団員ら千数百人がいたが、列車は来ない。翌日最後の引揚げ列車が来るが、乗ることができず、そのまま開拓団へ戻ると、どの家もみな家財はなくなっていた。ソ連の飛行機の掃射が始まり、歩いて鉄道幹線の大きな都市へ向けて避難することになる。その途中、従来の公道を歩くと、周辺の武装集団等から狙われるために、夜中に行軍したり、原始林の山を越えていく。そのようにしても襲撃を受けることもあり、また川が越えられずに、馬車は捨てられ、荷物も大半はなくなってしまう。しかも、食料もつき、雨が降るとぬかるむ地面を数百キロ進むのは、健康なものにも困難であり、途中、声をあげて泣く子どもを自分の手で殺すもの、川に流すもの、周囲の農家に預けるもの、あるいは、そのまま置き去りにせざるをえない母親も多かったのである。怪我や病気のものは途中に残して、最終的に22日後に、方正にある収容所に入った。多くの人は衣服もほとんどなく、布切れや麻袋を身体に巻きつけていた。収容所についてからも、食料もなく、厳冬期をむかえて多数の餓死者や病死者を出した。自分は運良く生き残って日本に帰ってこられたのだ。⁽⁶⁶⁾

こうした日本敗戦と満洲国崩壊にともなう逃避行、難民体験の語りは、開拓団の人びとの語りの一種の型のようなモデル・ストーリーになったと坂部は指摘する。モデル・ストーリーとは、「個別の経験の語りにたいして、語り手に語彙や説明の仕方を提供したり、逆に、語りの枠組みとして規定的な働きをしたりする、語り手の属するコミュニティの代表的な語り」のことである⁽⁶⁷⁾。「不思議なほどの類似」はまさにこのためであった。しかし、なぜ、開拓団の人びとのモデル・ストーリーでは逃避行の語りが前面に出されることになったのだろうか。

(3) 満洲での体験を語ることの困難

過酷な状況下で何とか帰還した開拓団であったが、敗戦直後、互いの安否を確認し合う状況が過ぎ、日本社会が落ち着きを取り戻し始めると、満洲での体験を語ることは難しくなった。蘭信三によると、その困難さには4つの要素があるという。それは、(1) 体験を言葉に表現することの困難さ、(2) 体験を語る時の精神的な苦痛による困難さ、(3) 語ることが開拓団をめぐる加害―被害関係を告白したり・告発したりすることにつながるという地域社会での困難さ、(4) 満洲移民への社会的な批判によって生じるという語ることの社会的困難さである⁽⁶⁸⁾。

(4) の「満洲移民への社会的な批判」による「語ることの社会的困難さ」とはどういうことか。戦前は「お国のため」や「鉄の戦士」ともてはやされ、開拓団は出征兵士のようにして満洲に送り出された。しかし、国内へ引揚げると一転して、「満洲帰り、外地からの引揚者」として白眼視されることになった。こうしたギャップに満洲から帰還した人びとは自身の満洲での体験をどのように位置づければ良いのかと苦しんだ⁽⁶⁹⁾。戦後の日本社会が平和と民主主義という価値観に転換されたとき、満洲あるいは満洲にかかわった個々人の経験は否定されたの

も同然であった⁽⁷⁰⁾。

すなわち安定し始めた戦後日本社会では、戦争、植民地支配は観念的に否定され、満洲での体験を語ることは抑圧されていった。反戦平和という価値観にそった戦争の語り、被害の語りは聞かれても、そのマスター・ナラティブ（支配文化がもつ語りの枠組み⁽⁷¹⁾）にそぐわない語りは聞かれなくなっただけでなく、それを語ること自体が困難となったのだ⁽⁷²⁾。前節で述べた逃避行を語るモデル・ストーリーは、こうしたマスター・ナラティブへ対抗するものであった⁽⁷³⁾。

では、(3)の「体験を語ることが加害―被害関係の告白・告発につながるという地域社会での困難さ」とはどういうことなのだろうか。満洲での体験を語ろうとするとき、自分自身の行為であれば罪悪感に苛まれて語ることが困難となることがある。その告白の行為に共同体の誰かが関与していれば、それは告発という様相を帯びてくる。懺悔は自己の崩壊を招きかねないし、告発は地域社会における権力構造に立ち向かうことにもなりかねなかった。戦前からの地域の権力構造や人間関係が温存（維持）された地域社会では、告発になりうる体験は語り得なかったのである⁽⁷⁴⁾。

こうして、満洲開拓の記憶は戦後の日本社会で長らく忘却に追いやられることになった。開拓団の人びとの記憶を語ることが抑圧されてきたのだ。しかし、1960～70年代以降、人びとは満洲開拓の記憶を語り始める⁽⁷⁵⁾。慰霊碑の建立と開拓史編纂が、これまで個々人の記憶の奥にしまいこまれていた満洲の経験を想起する一つの契機となったのである。だが、それ以降も語られないことはあった。

多くの体験者が亡くなった今、「もちろん、この会の発足は遅すぎました。いいや、むしろ機が熟したとも言えます。それは、いまだから語れるからです。以前は、口はばかれて満洲の話は出来なかったのです」。⁽⁷⁶⁾

これは2002年に長野県飯田市及び下伊那郡下の人びとが集う「満蒙開拓を語りつぐ会」が発足した際の会合で、ある年配の女性が語った言葉である。満洲に関する語りが出出するまでには、抑圧という壁が幾重にも重なって存在していたことがわかる。蘭が言うように、満洲移民という出来事はその地域の人びとの心に澱のように沈殿し、いわば地域のタブーであったのだ⁽⁷⁷⁾。

3 「記憶を受けとめる」ということ

ここまで、満洲開拓という政策とはどのようなものだったのか。満洲へ開拓団として赴いた人びとが、戦後の日本社会で満洲での体験を語ることがどれだけ困難だったのかということを見てきた。戦争展で出会った男性の両親のように満洲開拓に反対した人の事例を探したが、管見の限り見つけられなかった⁽⁷⁸⁾。「見つけられなかった」ということから、こうした体験も語ることが困難な状況に置かれていたのではないだろうかと思像できる。また、男性の語りから

は、記憶において「語り得ること」と、「語り得ないことがある」ということを改めて認識した。あるいは、語ったかもしれないが支配文化の中で無視されてきたという可能性にも気づかされた。いずれにせよ記憶の語りを受けとめるとき、こうしたことに意識的でなければならないことを実感することになった。

筆者の目的は戦争展で男性が語った「仕方がなかったということで済ませてもらっては困る」という言葉の意味について探ることであったが、そのなかで筆者は次の阿部・加藤（2004）による記述を想起した。

ある出来事がなんであったのかをわたしたちに報せてくれる史料があるとき、それはただ過去をたどる導きとしてわたしたちのまえにあるのではなく、歴史を知るときにわたしたちはなにを考えなくてはならないのか、なにが問われているのかの意図の所在を教えているのである。そして史料を読もうとするものは、史料がそれ自体にふさわしく読まれるような状況を作り出す要請を史料から受けているのである。⁽⁷⁹⁾

これまで研究会では戦争の実相を伝えることに主眼を置いてきた。筆者もそれに同意していた。では、そのときに、わたしは「なにを考えなくてはならないのか、なにが問われているのかの意図」をしっかりと捉えていただろうか。阿部らの記述をくりかえし読みながら、どのように記憶を受けとめてきたのか、わたしは次のように振り返った。

元兵士が、証言ビデオの中で、上官の命令に逆らえず、あるいは部下から馬鹿にされることを怖れるあまり、残虐な行為をしたと語ったとき、受け手のわたしは、「仕方がなかった」状況だったのだと「理解」し、だから二度と同じ状況を作らないようにしなくてはならないのだという「答え」に到達していた。それは、わたしの思考のプロセスを経ていただろうか。と、考えたとき、そうではなく安易に「答え」——あるいは解答といったほうが適切だろう——を出していたことに気づく。史料にせよ、記憶の語りにもせよ、それを受けとめるとき、そこから課題を見出すことは、それほど簡単なことではなかったはずであった。男性が語った「仕方がないということで済ま」せてはならないという言葉に衝撃を受けたのは、それが私自身に向けられたものだということを感じ取っていたからだったのかもしれない。

ここでの気づきを本論文に引きつけるならば、記憶を受けとめるとき、すべきことは思考を止めずに考え続けることである。しかし、これにも解答はない。だからこそ、筆者らにできるのは〈わたし〉に引きつけ、思考をし続ける真摯さ、誠実さをもつことだった。それには葛藤が生じるだろうし、苦痛を伴うことでもあろう。それでも、それが記憶を受けとめる、「問いへの忍耐」をもつということなのではないだろうか。

記憶を後世へ伝えていくために、記録しなければならない。そのとき、記録の伝え手は、まず記憶の受け手としてのあり方が問われることになる。記憶はそれがある人のものだが、受け手は、その記憶が「ふさわしく」受け止められるように思考しなくてはならない。このプロセスの大切さを、筆者らは男性から教えられたのだと思う。

おわりに

この論文では、「問い」とは何かを問うことで出合った満洲開拓についての史実を扱ってきた。そこで筆者であるわたしたちが何よりも心がけたのが、歴史への真摯さ、である。

どのように歴史が書き換えられることになるうとも、その叙述が書き換えられるかぎり、そこにその出来事があったということを、まずはそのままに受けとめること。また、記憶を伝える主体である「わたし」とそれを受けとめる主体である「わたし」のあいだを架橋するのは、〈わたし〉だけであるということを受けとめること。それは、語り手と聞き手の思考には共通の足場はなく、記憶の吐露と聴取の交換において、語り手の語りが聞き手の理解の到底及ばないはるか彼方にあり、語り手と聞き手の埋まらない溝を思い知らされたあとの沈黙の交換を謙虚に受けとめるということである。語り手の背景や立場による語りの違い、記憶の誤差を見渡せる「上空に舞い上がろうとせず、感触を確かめながら、少しずつ襲を横に広げていく」⁽⁸⁰⁾のように誠実に思考する。鷲田清一はこれを「『社会』から離脱し、『私』のなかに〈社会〉をつくること」と表したが、それを近代歴史学につながるわたしたちになぞらえるならば、歴史を語る諸事情を抱えた個々の「『わたし』から離脱し、『わたしたち』のなかに〈わたし〉をつくる」ことの誠実さであるはずだ。この誠実さを貫徹するにあたっては、何が正義で悪なのか、被害と加害を分断する境界線、運命の別れ目——あるいは、「仕方がなかった」で済まされはしないすべてのこと——に対しての解答などないと弁えること。リルケのいう「問い」にある忍耐を引き受けることを何よりも謙虚に受けとめていくことになる。

歴史に残されることのない語りは、何年もの間、語り得なかった沈黙と日々の景色が封入されて織りなされてきたものである。記録として綴られない怒り、主張、揉め事の封殺もそこには織り込み済みである。けれど、織りなされた記録から「それは仕方がなかったことだね」と安易に呟く我々に残るのは、「あった」ということさえわからない無知である。

だからこそ、どのように歴史が書き換えられようとも、そこにその出来事そのものがあったということそのままに受けとめていきたい。歴史に確かにある語り、記録に残されない人びとの声の残響をつぶさに観る。観ることで生まれる小さな歪みの気配に耳を傾け、さらに目を凝らす。そうすることで、語る「私」の沈黙と聴く「私」の絶句とがはじめて対話する。目指すべきはいつか、孤高と共働が一緒にある世界、それはすべての「私」が平らかに均衡し、安心して自らの語りを語りうる〈私〉の地平である。「あらゆる解放は、人間の世界を、諸関係を人間そのものへ復帰させることである。」

この論文で示そうとした、「『仕方がない』では済まない」という言葉が問いかけるわたしたちの問いへの忍耐は、まだ始まったばかりである。

註

- (1) Rilke, R. M., *Brief an einen jungen Dichter*, Frankfurt am Mein, Leipzig, Insel, 1929. (リルケ／高安国世訳「若き詩人への手紙」『若き詩人への手紙 若き女性への手紙』新潮文庫、1953年、52～53頁。
- (2) 澤井陽介「新しい社会科が目指す地平『未来志向』」安野功他『平成29年版小学校新学習指導要領ポイント総整理社会』東洋館出版社、2017年、1頁。
- (3) 北俊夫「『知識・技能の活用力と説明力』をみる評価問題」『教育科学社会科教育』第53巻第4号、2016年、122頁。
- (4) 文部科学省 www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm、2018年8月21日情報取得および東洋館出版社編集部『平成29年版小学校新学習指導要領ポイント総整理』東洋館出版社、2017年、316頁。
- (5) 澤井前掲書 3～4頁。
- (6) 同上5頁。
- (7) 同上6頁。
- (8) 同上5頁。主体的・対話的で深い学びにつなぐ教師が自問自答する教師自身の具体的な問いや授業づくりについての興味深い論考として、ダン・ロスステイン、ルース・サンタナ／吉田新一郎訳『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』新評論、2015年がある。「より良い教え方」は教師が「必ず教えなければならないことに焦点を絞るようになり」、同書に示される「質問づくりを使いながら、『考える習慣を生徒たちが身につけるように教えるように』なることである」(同書278頁)。また、「教師たちは、管理体制、意思決定のあり方、教員養成、教員評価、生徒たちの成績、テストの仕方、テストの結果などについての、おわりのない話し合いや頻繁な議論を続ける」主体的・対話的で深い学びにつながる教員たちの教育への姿勢ももちろん必要である(同書274頁)。「質問づくり」の具体的な方法は同書第2～8章を参照のこと。
- (9) 山田麗子「問いを生み出す学び舎中学歴史教科書」『歴史評論』第804号、2016年、13頁。
- (10) 同上32頁。
- (11) 同上33頁。
- (12) 同上38頁。
- (13) 成田龍一「性暴力と日本近代歴史学——『出会い』と『出会いそこね』」上野千鶴子他編『戦争と性暴力の比較史に向けて』岩波書店、2018年、260～261頁。
- (14) 同上262～268頁。
- (15) 人見佐知子「オーラル・ヒストリーと歴史学／歴史家」歴史学研究会編集『第4次現代歴史学の成果と課題 3. 歴史学の現在』2017年、132～133頁。
- (16) 同上135頁。
- (17) 同上138頁。
- (18) 同上136頁。
- (19) 同上137頁。
- (20) 柿本昭人・嶋守さやか『社会の実存と存在——汝を傷つけた槍だけが汝の傷を癒やす』世界思想社、1998年、122～123頁。
- (21) 同上123頁。
- (22) 同上123頁。
- (23) 同上124頁。
- (24) 同上126頁。

- (25) 同上127頁。
- (26) 同上122頁。
- (27) 柿本昭人「客体が諸主体の関係の編み目から抜け出す時」『経済論叢（京都大学）』第176巻第3号、2005年、79頁。
- (28) Rilke, R. M. 前掲書64頁。
- (29) 柿本昭人「労働可能性に巻き取られる社会——アウシュビッツの回教徒から」『ヒューマンセキュリティ・サイエンス』第5号、2010年、14頁。
- (30) 同上21頁。
- (31) 人見前掲書136頁。
- (32) 成田前掲書280頁。歴史が履歴に依存することについて、成田は「視点が固定され不動のものとなっており、それが客観性—普遍性を示すものとされてきたことへの批判」として示している。それは、「対象の選定がすでに結論を先取りしているということとともに、事象の切り取り方にすでに視点（＝軸）が入り込んでいることへの指摘」である。「比較の視点、比較の対象の設定という、比較史の出発点そもそもが、歴史的な背景や条件、制約と拘束を持ち、歴史的に形成されてきている。その論点を組み込まなければ、現在の認識がそのまま歴史—過去の出来事を裁断することになってしまう。比較史の転回を、歴史学における方法的な課題のひとつとするのは、こうした理由によっている」（同書279頁）。
- (33) 軍需品の輸送・補給にあたる兵。旧陸軍の兵科の一つ。『広辞苑第六版』岩波書店、2008年。
- (34) 日中友好協会ではパネルの貸出も行っている。<https://www.jcfa-net.gr.jp/>
- (35) 日本軍の管理下に置かれ、性的奉仕をさせられた女性たちのことを「慰安婦」と呼称することは広く流通している。「慰安所」についても同様である。しかし、その実態は「性奴隷」と呼ぶよりほかないものであり、この呼称は適切ではないと考える。ただ一方で、代替すべき用語がまだ成立していないことから、本稿では括弧を付けて使用することとした。
- (36) 被害の問題を追求していけば、例えば多くの兵士の命が粗末にされたのはなぜだったのかということに直面する。それは同時に加害を生み出す要因にもなっていた。林博史「加害と被害の重層構造—日本人の戦争体験をとらえ直す」『立命館平和研究』第17号、2016年。また、日本で空襲の被害を真っ先に受けたのは軍需工場など軍事に関係する場所だったが、それは加害の武器を生み出す場所であったことが要因だった。そもそも、被害と加害というのは二分法で分けられるものではなく、常に重なりあっているものである。個人に焦点を当てれば、同じ人がある文脈では加害者であるが、一方では被害者であるというようなこともある。こうした重層性を踏まえた上で同じ過ちを繰り返さないようにするには、日本社会における加害の側面を避けがちな状況は克服する必要があるのではないか。
- (37) 五郎丸聖子「第3回むさしの平和のための戦争展報告——異なる声が重なる場について」日本の戦争責任資料センター・ボランティア雑誌『Let's』No. 88、2017年6月。
- (38) 例えば、満洲移民史研究会編『日本帝国主義下の満洲移民』龍溪書舎、1976年。
- (39) その先駆けとして、満洲開拓史刊行会編・発行『満洲開拓史』1966年、増補再版1980年。
- (40) 代表的な研究としては、蘭信三『「満洲移民」の歴史社会学』行路社、1994年や山本有造編『「満洲」記憶と歴史』京都大学学術出版会、2007年などがあげられる。
- (41) 満蒙同胞援護会などが作成した簿冊群を指す。同資料の整理、調査の詳しい経緯については、阿部安成・江竜美子「「満洲引揚」スタディーズの試み——整理、調査、議論——」『滋賀大学経済学部 working paper』NO. 98、2008を参照されたい。
- (42) 「満洲」は、満洲国と関東州を合わせてイメージされることが多いが、基本的には「満洲国」は「独立国」であり、関東州は日本の疎開地であった。蘭信三「戦後日本社会と満洲移民体験の語りつぎ」浜日出夫編『戦後日本における市民意識の形成』慶應義塾大学出版会、2008年、

- 80頁。
- (43) 戦後の日本では“満洲”は「満州」と表記されているが、その根拠はよくわからないという。もっとも繰り返しになるが江戸時代から両者の混用は見られている。中見立夫「歴史のなかの“満洲”」『環』10号、藤原書店、2002年、83～87頁。
- (44) 蘭信三編著『人の移動事典 日本からアジア・アジアから日本へ』丸善出版、2013年、39頁。
- (45) 一般的に移民政策に反対していた高橋是清蔵相が殺害されたことで、移民政策拡大の障害が取り除かれたと言われている。だが、加藤聖文は、この百万戸計画が2.26事件を機に急遽立案されたのか、もっと前から準備されていたのかは定かではないと指摘する。この計画が浮上した背景は今なお不明な点が多い。加藤聖文『満蒙開拓団 虚妄の「日満一体」』岩波書店、2017年、100頁。
- (46) 同上、74頁。
- (47) 農林省は、昭和恐慌後の深刻な農村状況に対して1932年より農村の救済と再建のため経済更生運動を進めたが、満洲移民とこれは全く別物であった。だが「二十年百万戸送出計画」で送出される大部分は農村在住者であったことから、満洲移民が国策となった段階では、経済更生運動に満洲移民事業は取り込まれることになる。それが「分村移民」という計画であった。大日方悦夫『満洲分村移民を拒否した村長 佐々木忠綱の生き方と信念』信濃毎日新聞社、2018年、81頁。
- (48) 一町村単独で開拓団を組織した分村移民のほかに、分郷移民という形式もあった。これは一郡を送出単位として組織されたもの。これらの形式は母村の社会関係等がそのまま持ち込まれることとなり、移民の応募が得やすく、移民の情緒が安定し、移民間の問題発生が少なく、しかも定着率が高いと考えられた。蘭信三『「満州移民」の歴史社会学』行路社、1994年、204、225頁。
- (49) 同上、48～69頁。
- (50) 1930年から31年にかけての昭和恐慌によって農村の逼迫が激しくなったため、1932年9月27日、更生施策の実施機関として経済更生部は設置された。農林大臣官房総務課編『農林行政史第1巻』農林協会、1963年、203～208頁。
- (51) 大日向村では村役場が中心となり産業組合などと密接に連携して分村計画は進められた。分村団員は地主層から小作層まであらゆる階層を含み、また2年という短期間で予定数200戸近い187戸を送出し目標をほぼ達成した。このような「成功事例」を中央は高く評価し、利用した。メディアでも大きく取り上げられ、また、和田伝の『大日向村』（1939年刊）は前進座で上演されると興行的にも成功した。加藤前掲書、139～140頁。
- (52) 加藤前掲書、118頁。
- (53) 同上、127～129頁。
- (54) 同上、152頁。
- (55) 分村（分郷）形態での移民送出にあたって村や部落に強制割当てが行われる例は少なくなかった。例えば下高井郡高社郷開拓団の送出のケース。当時、満洲移民を説得して回った山本直右衛門は（のちの団長）「当時の人たちはだれかが行けばという気持ちだった。（中略）わたし自身だって「赤紙」をもらったような気持ちで満州に渡った。」と述べている。小林弘二『満州移民の村』筑摩書房、1977年、97頁。
- (56) 加藤前掲書、152頁。
- (57) 山本有造編『「満洲」記憶と歴史』京都大学学術出版会、2007年、12頁。
- (58) 1945年8月時点における「満州」在留日本人人口について正確な統計はない。満州国人口統計は、①総務庁統計処理系列の「現住戸口統計」、②治安部警務司系列の「現住戸人口統計」、および③1940年に行われた「臨時国勢調査」があるが、前2者については、1942～43年以降

の版が刊行されなかったと思われ、終戦時の数値は一部を除いて未詳である。山本前掲書、27頁。ただ、戦後において「(戦前の満州諸種人口統計を参考にしたほか) 人口担当行政官であった50名余名の者その他各地職場別在職者数の調査など、合計1000余名の参考人を外務省に招致検討した結果を、さらに満州国統計事務担当責任者11名を招き、3日間の会議を経た末の結論」として弾き出された推計が残されている。佐久間真澄著、柴田しず恵編『記録 満州国の消滅と在留邦人』のんぶる舎、1997年、56～57頁。

- (59) 上田貴子「第2部満洲 総説」蘭信三編著『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、2008年、209～210頁。
- (60) 山本前掲書、8～9頁。
- (61) 蘭(2008)前掲書、57頁。
- (62) 山本前掲書、8～9頁。
- (63) 蘭(2008)前掲書、80頁。
- (64) 山本前掲書、8～9頁。
- (65) 同上、9頁。
- (66) 坂部晶子『「満洲」経験の社会学 植民地の記憶のかたち』世界思想社、2008年、99頁。
- (67) 同上、97～98頁。
- (68) 蘭(2008)前掲書、58頁。
- (69) 蘭信三「満洲引揚者のライフストーリー研究の可能性——歴史実践としての『下伊那のなかの満洲』」、福岡良明他編著『戦争社会学の構想——制度・体験・メディア』勉誠出版、2013年、149頁。
- (70) 蘭(1994)前掲書、195頁、蘭(2008)前掲書、61頁。
- (71) 坂部前掲書、97～98頁、桜井厚『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房、2002年、36頁。
- (72) 蘭(2013)前掲書、150頁。
- (73) モデル・ストーリーは、マスター・ナラティブと共振することもあるし対立や葛藤を引き起こすこともある。桜井前掲書、36頁。
- (74) 同上、148頁。
- (75) 開拓自興会(満洲から引き揚げてきた開拓民の救済のため開拓民自ら組織した団体)の活動とこうした開拓団の人びとの動きとは大きく関連している。当初、同団体は国内再入植の斡旋などに取り組んでいたが、1958年ごろに同事業がほぼ完了したため、以降は、①引揚者給付金の支給、②満洲開拓物故者慰霊碑の建立、③遺骨収集促進、④開拓史編纂、⑤慰霊碑法要の執行という活動に転換した。趙彦民「満洲開拓をめぐる「記憶の場」の形成と継承——戦後の日本社会における集団引揚者の事例を中心に」山本前掲書、468、476～477頁。
- (76) 蘭(2013)前掲書、152頁。
- (77) 同上、156頁。ごく近年になりようやく当事者が語られ始めた満洲での体験として性暴力被害の例があげられる。詳しくは以下を参照されたい。猪股祐介「語り出した性暴力被害者——満洲引揚者の犠牲者言説を読み解く」上野千鶴子他編著『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店、2008年。
- (78) 「満洲へ行くことを強いられた」という証言はいくつか見られたことから、開拓団への参加に対して拒否を表明した人が存在したことは考え得る。とはいえ、分村計画を拒否した下伊那郡大下条村の村長・佐々木忠綱についてはよく知られているが、その他に記録は見つけられなかった。また、そもそも、男性の両親の場合、「満洲開拓に反対した」ということであるから、必ずしも開拓団参加に拒否したケースとは言い切れない。だが何らかの形で満洲開拓に反対の意思を表明したということだろう。いずれにせよ、詳細な調査が今後の課題として残された。

佐々木忠綱については、以下を参照されたい。大日方悦夫『満洲分村移民を拒否した村長 佐々木信綱の生き方と信念』信濃毎日新聞社、2018年。

- (79) 阿部安成・加藤聖文「「引揚げ」という歴史の問い方（下）」『彦根論叢』第348号、2004年、67頁。
- (80) 鷺田清一「折々のことば850 おもしろいかつまらないかをなんとか自分でわかるようになりたいと思った。」津村記久子」朝日新聞2017年8月21日。

(受理日 2018年8月22日)